

第二軍司令部略歴

年月日	概	要
昭和七、	軍令陸用才八十九号に依り才二軍司令部の編成を令せられて以来満洲国間島省 間島に在ったが昭和十八年十月三十日大皇帝命才八百八十一号を以つて濠北方面 派遣を命ぜらる	
	十二月二十九日附左の通り発令せられた	
	才二軍司令官 陸軍中將 七田一郎	
	補参謀本部附 近衛才一師団長 中將 豊嶋房太郎	
	補才二軍司令官	
	又十二月二十五日附左の通発令せられた才二軍参謀長少將 堀毛一磨	
	補才一軍参謀長	
	南方軍参謀副長 少將 藤塚止戈夫	
	補才二軍参謀長	
一、三	編成更改を完結同夜才一梯団を荒田大尉指揮し十一月四日才二梯団を野地中佐 指揮し十一月七日迄に全方と釜山港に集結した	
	司令部は摩耶山丸に主力(輸送指揮官、野地中佐)にぎつし丸(輸送指揮官永 井中佐)に一部を分乗し十一月九日釜山港と出帆した途中十一月十四日高雄寄 港(十九日出港)二十三日「ダバオ」寄港同港にて「はんぶるぐ」丸に移乗し	

年月日	概	要
昭一九五	二十七日同港出港十一月二十九日「ハルマヘラ」カウ「鴻寄港同港にて豊丸、神日丸に分乗二梯団となり夫々「マノクワリ」に前進オ一梯団は十二月四日オ二梯団は十二月八日「マノクワリ」に上陸した 右の向衛兵附派水少尉、釜山に於て搭載作業中船内より埠頭に墜落頻死の受傷を負い門司陸軍病院に入院 軍司令官は十一月十三日東京出發空路前進途中「ダバオ」に於て輸送中の軍司令部を掌握「アニボン」を経て十二月一日「マノクワリ」に進駐した オ三師団先遣隊勝又大尉以下二百三十九名を司令部に飯屋せしめられ掌握司令部の主力は「マノクワリ」にしたが防諜班及情報班の主力は軍作戦地内に各工作班として夫々派遣せられた	
一九七	戦局の推移と後方補給の關係上司令部の位置と変更するの必要を生じ一部（渡辺大尉以下約二百二十名及築城班の主力）を「ミ」号部隊として同地旅団長の指揮下に入らしめ主力は「ベラウ」地袂に転進した七月三日より海陸兩路に互り逐次転進を開始途中各種障害を排除して難行を続け十月上旬迄に大部は「イドレ」に到着した此の間約転進者の四割以上の損耗を生じた 「イドレ」に於ては戦斗司令所要員のみを同地に残り次の大部は夫々同地周辺に分散し現地自活を実施せしめた此の間転進の余波並に敵機の爆撃により相当数の損耗を出した	

一九、二

二野根司令官以下全員（約四七〇名）を軍司令部要員に転属しを吸収した
日隈、松本両調査隊（司令部要員主体）を「コカス」及「テミナプアン」に派
遣した

二〇、二

戦斗司令所を「コカス」西方に移動（取斗山）した
軍司令部は二月十八日取斗山に進駐した

三一、八

大命による戦斗序列の変更作戦地域の拡大に伴い軍全般の急率指揮を察見し
しめる為司令部を「セラム」地区に移動するに決し軍指令官は將校以下四十名
に追及を命じ（五月初め大発により海路前進す）四月二十九日「コカス」出発
空路「セラム」に前進同日「アニボン」に到着した。是より先「セラム」島軍
司令部派遣所として日隈参謀以下約三十名を「セラム」に派遣した

六一

オニ方面軍の現地復讐に伴い軍司令官は所票の司令部要員に繼續便による追及
を命じ空路「シンカン」に向った。六月十三日同地に到着
司令部の移動に次ぐ移動により司令部要員の大部旧オニ方面軍才十九軍司の販
員を主力とするに至り又、司令部の人員も軍直部隊中現地復讐した者を司令部
附に吸収したため約一万以上となり同地に於て作戰任務を遂行中終戦となる
終戦迄に於ける司令部の死傷人員数は一八〇九名となっている

第二軍野戦兵器廠部隊略歴

年月日	概	要
昭二八、一〇、一六	搜索才五十六連隊（久留米）に於て動員完結同日才三十野戦兵器廠編成完結	
一一、二八	面都ニューギニア「ソロン」に到着同地に於て従軍（ソロン出張所）	
一一、三〇	「ハルマヘラ」内地区上陸同地に於て従軍（ハルマヘラ支廠）	
一二、一	函部ニューギニア「マノクワリ」に到着同地に於て従軍（マノクワリ本廠）	
一二、六	現地編成（復員）下令	
一九、三、二三	編成（復員）完結（才ニ軍野戦兵器廠）	
	マノクワリ本廠將校三一名下士官兵九九三名「マノクワリ」	
	ハルマヘラ支廠將校四名下士官兵一五四名「ワシレ」	
	ソロン出張所將校四名下士官兵六六名「ソロン」	
	ピアク支廠將校四名下士官兵一〇七名「ピアク」	
	サルミ支廠將校四名下士官兵一〇一名「サルミ」	
四、二五	「ピアク」支廠要員同地に到着従軍	
四、一四	「サルミ」支廠要員同地に到着従軍	
五、二九	「ミ」號編成下令同日完結勢独立才二大隊才三大隊に本廠より將校一五名、下士官兵五一七名出張「マノクワリ」本廠人員將校一三名下士官兵三二二名となる	
七、一七	「ベラウ」連隊所開設のため星出少尉以下一六名「マノクワリ」を出發す	

(々)

1441

九	自昭一九、五、二九 至昭一九、〇、三一 自昭一九、一、一 至昭二〇、三、一 自昭二〇、三、一 至昭二〇、八、二四 昭二〇、八、二四	ベラウ連絡所要員將校以下一一名「イドレ」到着同地に從軍途中下士官兵五名 戦死 勢才ニ号才一期作戦参加 勢才ニ号才二期作戦参加 勢才三号作戦ニ参加 終戦
九三〇	「ミ」号編成解除同日勢才ニ大隊才ニ大隊解除同日編成要員原所戻 労働連隊才ニ大隊要員として本廠より將校以下七〇名「ホーランジャ」に出発 労働連隊才ニ大隊要員として「ソロン」出張所より「ホーランジャ」へ出発（ 下士官兵一五名）	
二、四、一五	西部ニユーギニア島「マノクワリ」に於て終戦業務に従事 復員内地帰還のため西部ニユーギニア島「マノクワリ」乗船（本廠） 名古屋港に上陸	
五二七	復員完結 同日召集解除（予備乗船入）マノクワリ本廠將校以下一八六名 名古塵港上陸	
五二六	復員完結同日召集解除（ソロン出張所將校以下五五名）	
五二七		
六、八	「ホーランジャ」派遣労働連隊要員内地帰還のため西部ニユーギニア島「ホー ランジャ」乗船	
六二〇	田邊港上陸	

(5)

1442

年月日	概要
昭二、六、三	復員完結同日召集解除 （ホーランジャ派遣要員将校以下八五名） 歴代部隊長名 陸軍中佐 弘 本 正 輔

第二軍野戦自動車廠略歴

年月日	概 要
昭一八、一〇、一	(月日推定) 軍令陸甲ヲ 号よりヲ三十野戦自動車廠の編成を命ぜられ輜重兵ヲ三連隊補充隊に於て編成に着手
一〇、七	(月日推定) 輜重兵ヲ三連隊補充隊に於て編成完結 廠長現地着任
一一、三	大阪港出帆 西部ニユーギニアに向ふ
一一、二〇	マニラ港寄港
一二、五	ハルマヘラ島ワシレ寄港 支廠要員(將校以下約百七十名)上陸業務開始
一二、八	西部ニユーギニア、マノクワリ着 爾後同地に於て補給修理業務に従事
一三、七	(月日推定) 出張所要員(將校以下約九十六名) 西部ニユーギニア、ソロン着 同地に於て業務開始
一九、一、一〇	中支、北支よりの補充要員(將校以下約百名) 西部ニユーギニア、マノクワリ着
三、一五	(月日推定) ヲ二軍野戦自動車廠の編成改正を軍令陸甲ヲ 号より命ぜられヲ三十野戦自動車廠に於て編成に着手
四、一五	(月日推定) ヲ三十野戦自動車廠の復員完結ヲ二軍野戦自動車廠の編成完結(人員資材充足)
五、一〇	(月日推定) 將校以下約三十七名を西部ニユーギニア、ピアク島に將校以下約

年 月 日	概 要
昭二九七	十三名と同サルミ島に派遣同地に於て補給修理業を開始す (月推定) 西部ニューギニア島ビアク島の戦闘により將校以下約三十七名行方不明となる
七	西部ニューギニア・マンホル島派遣下士官一行方不明となる(戦斗のため)
八	(月推定) ヨニ軍司令部のイドレ転進のため將校以下十一名を前進せしむ
八	(月推定) ヨニ軍司令部の転進に伴いヨ三十五師団長の指揮に入る
八	ヨ三十五師団司令部のソロン転進に伴いマノクワリ支隊長へ陸軍少將派派遣の指揮に入る
八	三号部隊編成に伴い將校以下約二百名を以下三号ヨ三大隊を編成支隊長の直轄として警備に従事せしむると共に主力は中地区隊(隊長独立山砲兵連隊長若山大佐)の指揮に入り警備に当ると共に補給修理に従事
二〇、八	(月推定) 支隊出張所、サルミ派遣隊及内地より補充人員にしてハルマヘラ、ワシレ島に到着しありし將校以下八百五十名各比隣部隊に転属す (転属部隊記述なし)
八二五	作戦任務を解除せらるゝ尔後同地に於いて終戦処理業務並に現地自活
二、五、二八	(日推定) 復員のためマノクワリ島出帆
六一一	復員完結

		歴代部隊長名
		陸軍中佐
		岩野 八千雄
		部隊事情精通者
住	所	振官
炭知果知多那路滑野 附		氏 名
大尉		竹内 豊次

(2)

1446

第二軍野戦貨物廠略歴

堅才九移動製材班長 岡 俊 三

年 月 日	概 要
昭一八、一〇、五	昭和十八年九月二十九日附陸軍密才六三一九号に基き陸軍商品本廠に於て編成開始十月二十八日假編成完結
一、一、三	十二月十四日現地に於いて台灣特設勤務團を合し編成完結而編制は主計將校一 主計下士官一 雇傭人三七 台灣勤務団員九八 計一三七名大阪港出發
一、三、三	マニラ港入港
一、三、八	西部ニューギニアモルラカ州マノクワリイ上陸ヲ二軍司令官の指揮に入る
昭一八、一、二、八	勢才一号作戦に参加
昭一八、一、二、七	マノクワリイ出發
昭一九、二、一、八	西部ニューギニア モルラカ州サルミ上陸ヲ三十六師団長の指揮に入る
二、二、五	サルミ及マラフィン附近の警備並作戦準備に参加
自至 四、二、五	本作戦中台灣勤務団員一名戦病死
自至 五、一、六	サルミ及マラフィン附近に於ける対空戦斗に参加
自至 五、一、七	トム及マラフィン附近に於ける戦斗に参加
自至 八、一、七	本作戦中の損耗 戦病死 雇傭人 三 勤務団員 二九 計 三九

(10)

1447

至有
二〇、二
ハ
二〇七

ハ
一〇

サル三地区敵追攻破砕作戦に参加

本作戦中の損耗 戦死 雇傭人三、勤労団員四、戦病死 下士官一、雇傭人四、勤労団員一、計五三

部隊は休戦に伴いオ三十六師団経理勤務部に編合せしめられる

編合時（休戦時）に於ける人員左の通り

主計将校一 雇傭人二二 勤労団員一五 計三八名

歴代部隊長名

陸軍主計大尉

岡

俊

三

(//)

1448

第五十五兵站地区隊略歴

年月日	概要
昭一八、九、七	勳員下令自九月十一日の間に福井県敦賀郡栗野中部ヲ三十六部隊（歩兵ヲ百十九連隊）に召集、九月十五日ヲ五十五兵站地区隊の編成を完結す
一〇、三	敦賀駅出発、十月四日宇品港にて輸送船富山丸並に龍波丸に乗船、十月五日岬釜山、六連島（船岡嶺成）高雄、マニラ、セブ港、ハルマヘラ島カウ湾に夫々寄港、同年十一月十五日西部ニューギニヤレ島「マノクワリ」に上陸す。 地区隊本部 警備隊本部 歩一中隊 歩二中隊 歩三中队 歩四中队 後衛銃中队 歩兵砲小队 勤務ヲ五十五中队 編成総人員一千七百二名

二二五

以来才ニ軍隷下に入り揚揚集積作業、道路及陣地構築並に警備に任ず

西郷「ニユーギニア」に昭和十九年二月十六日同「バボ」に同四月十三日同「ムミ」に夫々兵站支部を同四月十二日「ヌンホル」島に兵站出張所を開設す。昭和十九年五月二十九日「ミ」号編成下令により才五十五兵站地区隊は本部を除き他は才三十五師団の指揮下に入り各々「マノクワリ」(警備隊本部才ニ才四中隊及小隊、勤務中隊、勤務中隊の主力)

「バボ」(本部才ニ中隊、勤務中隊の各一部)

「ソロン」(才一中隊の主力及本部、勤務中隊の各一部)

「ムミ」(本部才三中隊、勤務中隊の各一部)

「ヌンホル」(本部才ニ中隊、勤務中隊の各一部)

島周辺の防衛並に陣地構築に任ず

本部は依然軍直轄となり同年七月十二日「マノクワリ」出發、西郷「ニユーギニア」に「ベラウ」地峡「ヤカチ」に到着す。以来兵站線の開発確保並に同地区の警備に任ず

六二〇

才五十五兵站地区隊は現地復帰を命ぜられ、兵站地区隊本部人員並に「バボ」支部人員は才二十二飛行場大隊に他は才三十五師団に夫々転属を命ぜられ、爾後各々現地復帰当時の編成及態勢の儘現任務を続行中同年八月十四日終戦に至る

終戦後旧才五十五兵站地区隊人員中才二十二飛行場大隊転属者は昭和二十一年

年月日	概 要
昭三、五、二七	二月三日「セレバス」島「マリンプ」附近に移駐、同年五月三十日内地帰還（本部復員完結は五月三十日）他は夫々「マノクワリ」「ソロン」一部は「ホーランジャ」(終戦後作業隊乗員として派遣者)に集結し同地より五月末乃至六月中に各々内地に帰還の上復員召集解除となる 附記 旧オ十五兵站地区疎開係死没者の遺骨及遺品は大部分は各中隊本部毎に夫々戦友により各地方世話部に還送す 俸給は昭和十八年八月末迄の死没者に対しては毎月支給済以後は一切支給し非ず 給養通報は各中隊本部毎に夫々世話部に提出しある筈なるも詳かならず 復員完結

第二野戦根據地隊司令部
勢第九四四六部隊
畧歴

年月日	概	要
昭二八、一〇、二五	軍令陸甲第?号によりオニ野戦根據地隊司令部の編成を命ぜられ上海オ十一	
一二、五	軍司令部に於て編成に着手	
一二、八	編成完結	
一二、一	(日推定)上海出港西部ニューギニアに向う	
一二、一	マニラ寄港	
一二、一七	ハルマヘラ島ワシレ港寄港	
一二、一七	西部ニューギニア、マノクワリ着、尔後同地附近の防衛並西部ニューギニア根據地設定業務に任ず	
一二、三〇	(日推定)將校以下二十数名ソロンに前進同地々区隊長の指揮下に入る	
一九、四	司令部將校以下はオニ軍司令部に同通信班將校以下は電信オニ十四聯隊に各々配属せらる	
二〇、一二、六	(月日推定)司令部下士官以下はオニ軍司令部に通信班、下士官以下は主として電信オニ十四聯隊に転属	
六、二〇	現地復員を命ぜられ將校以下各々現在地附近の最寄部隊に転属せしめらる。主たる転属先、オニ軍司令部オニ三十五師団電信オニ十四聯隊	

(15)

1452

年 月 日	
歴代部隊長	概
陸軍少尉 陸軍中尉	要
藤 塚 正 弋 夫	
稻 田 正 純	

第四工兵隊司令部隊略歴

年月日

概

要

昭一七、三二一 才四工兵隊司令部の編成を命ぜられ才一工兵隊司令部に於て編成完結

三三〇 全右に於て編成完結

四一 移駐の爲桂木斯出登林口に何う

自六、一七 滿州東部國境道路新設工事作業
至一、一五

一一八 林口出登

一一三 釜山出帆全日門司入港（十四時商）同日二十四時同港出港

一一五 依伯港に寄港（輸送船りま丸）

一一九 「ニューブリテン」島「ラバウル」に入港三十日同港上陸

一二七 「ガタルカナル」に前進のため高知丸にて「ラバウル」出帆

一三九 「ボーゲンビル」島に上陸

自一七、一三九 才四工兵隊司令部の爲侍并に「ボーゲンビル」島警備及交通作業
至一八、一三三 但し馬場大佐以下五名は十二月八日より二月七日迄「ガ」島に前進同地の交通

作業に任ず

二一三 阿蘇丸に乘船「イレベント」出帆「ラバウル」に何う

二一五 「ラバウル」上陸「馬場大佐以下五名は本隊に合す」

二二一 駆逐船浦波に乘船「ラバウル」出港

年 月 日	概 要
昭一八、ニ、ニ 至一〇、三、九	「ニューギニア」マダン上陸 東部「ニューギニア」ヒニステル山系突破作戦道路構築作業（マダン— アヤウ—クワトウ—ヤウワ—ユバ—ケサー—マデロイ—以東ヒニス テル山系 「ボガヂン」発マダンホーランチヤを経て西部ニューギニアに転進 但し馬場大佐以下五名はオニ軍司令部直轄 「サルミ」に上陸陣地構築並に警備及「サルミ」附近の戦斗に従事 （但し馬場大佐以下五名の一部人員は「マノクワリ」附近に於て交通作業の指 導並に警備に従事 以降終戦現地自活に移行 「リバティ」型輸送船に乗船内地帰還 名古屋港着上陸復員完結 （但し一部人員は六月十三日及六月十九日夫々名古屋及大竹に於て復員完結す）
二〇、八、一五	
二一、六、二	
六、一五	

第二十野戦高射砲隊司令部略歴

年月日	概	要
昭一八、二、一五	中部軍隷下にて編成を完結	
二、一八	宇品出發、オニ方面軍隷下に入る	
一九、二、一五	面部「ニエーギニア」マノクワリに到着、オニ野戦根據地隊司令官の指揮下に入る。爾後昭和二十年八月十四日に到る間、同地に於て「マノクワリ」周辺防空戦闘に従事す。	
三、九	「チ」号警戒機要員として伍長上田和一郎「ヌンホル」島に派遣す。同年七月二日敵「ヌンホル」島に上陸す。爾後上田伍長消息不明	
三、九	司令官「ムミ」地区巡視に随行せる陸軍中尉大神清同地に於て熱帯熱「マラリア」を發病後戦病死す。	
五、三	オ三十五師團長の指揮下に入る	
六、一	オ二十野戦防空隊司令部と併稱しありたるをオ二十野戦高射砲隊司令部と改称す（軍令陸甲オ四十五号オ五條に依る）	
六、六	一五〇〇海軍水上飛行基地通信所敵機の爆撃に遭い通信手として当隊より派遣中の守本上等兵戦死す。	
六、七	「チ」号警戒隊「マノクワリ」に於て編成之を当指揮下に入らしめられたるも敵の爆撃に遭い同年八月八日解散す。	

(19)

1456

年月日	概	要
昭一九、七、四	勢才一旅団長の指揮下に入る	
九、一	マノクワリ支隊長より防空隊に賞詞を受く	
一〇、一六	「マラリア」熱帯熱の爲陸軍一等兵南田幸助戦病死す	
一〇、二五	「マラリア」熱帯熱の爲陸軍曹長瀬野尾壯兵戦病死す	
二九	「マラリア」熱帯熱の爲陸軍一等兵中村修戦病死す	
二〇、一、二〇	才ニ軍の戦闘序列に入る	
二、二八	才ニ軍司令官より防空防に賞詞を受く	
三、三	「マラリア」熱帯熱の爲陸軍一等兵新澤博戦病死す	
六、三	「マラリア」熱帯熱の爲陸軍曹長穴戸博戦病死す	
七、一六	司令官中田大佐才ニ軍司令官より武功章を授けらる旨電報に接す	
八、一	才ニ軍司令官より賞電を受く	
八、四	停戦に関する詔書を拝す	
八、一九	軍命令に依り戦闘行動を停止す	
九、一	マノクワリ支隊命令に依り防空隊区分を解く	
一〇、一六	「マラリア」熱帯熱の爲陸軍上等兵高島昇戦病死す	
一、一〇	濠軍命令に基き防衛連隊要員として安部兵長、楠本兵長、中井兵長、近藤兵長、中小路兵長の五名を「ホーランチヤ」に派遣す	
二、三、二九	「マラリア」熱帯熱の爲陸軍上等兵小林敏夫戦病死す	

二、五、二八

復員完結

歴代新隊長

陸軍大佐

中田 秀平

のダ

田部 ユリヤニア

(21)

1458

野戦高射砲第四十九大隊略歴

大隊長 少佐 真 田 徳太郎

年月日	概 要
昭和八、一、二	満洲出發 大隊本部ヲ一、ヲ二中隊、大隊段列（除ヲ三中隊）
一九、二	西部「ニューギニア」ムミに到着同地防空警備
一九、三、二五	同地防空戦斗前後大回同に於て將校大隊長以下三名、下士官兵三名戦死す
一九、八、一四	上期間内に將校以下三三〇名戦病死す
一九、四、三	ヲ三中隊西部「ニューギニア」ピアクルに到着同地防空警備
一九、四、二九	同地防空戦に於て兵一名戦死す
一九、五、一七	敵上陸に際し防空並に地上戦斗に於て同月以降中隊長以下一三五名（中隊全員）生死不明なり（二十一、六、一四）復員完結す
	歴代部隊長名
	大 佐 樋 口 易 信 27期
	中 佐 三 島 武 雄 35期
	少 佐 真 田 徳太郎 44期

野戦高射砲第五十三大隊略歴

隊長、陸軍大尉 原 田 恒 治

年 月 日	概	要
昭一八一一 一九一一 自一九一四、二一 至一九一五	満州国東安省東安より転進 西部ニユーギニア属サルミ上陸、爾来同地の警備並に作戦に参加 サルミ附近に於ける封空戦斗並に地上戦斗に従事、左記の如く死亡す	死亡区分 將 校 下士官兵 計 状 況 戦 死 一一 一六一 一七二 大部分、爆薬、銃薬によ るものとす 戦 傷 死 一 二四 二五 総数の不良と激戦並に薬 物の不足による主として 戦 病 死 二九一 二九一 計 一三 四七六 四八八 マラリアとす
備考 林戦后准尉一、下士官兵三三名、戦病死す 右人員中一九、六、末日より七月上旬に亘り入江山附近の戦斗、友軍の状況不利 となり転進を命ぜられたる際「マラリア」と「アメーバ」性赤痢の重症患者約 二〇名あり部隊は極力收容に努めたるも密林内に行方不明となりたるものにし て終戦后該地附近を搜索せるに白骨若干あると認め死亡と確認せるも或は二三		

年 月 日	概	票
昭二〇、一二、	名敵手に入りあるやも知れず 蘭軍所務団要員として將校以下五七名「ホーランデヤ」に派遣す 歴代郭隊長名	
中佐	吉岡 丈男 (在満時)	
中佐	内田 益次郎 (戦死)	
大尉	小野 哲 (代理中浮虜を殺害せしめたる 原により連合軍に召換せらる)	
大尉	原田 恒治 (代理)	
大隊副官		
(住所)		
愛知県北設楽郡 津具村字大畑二		

クの外

西部ニニギニア

野戦高射砲第五十四大隊略歴

才ニ軍野戦高射砲才五十四大隊長 小田 島 義 悌

年 月 日	概 要
昭二六、八、二	編成完結爾来満洲国東部国境警備
一八、一〇、四	満洲国より転進爾来「ニユーギニア」に於て勅才一才乃至同才三才
二〇、八、一四	作戦「ソロン」に防空戦斗参加並基此設定業務に従事
二一、五、一四	終戦に關する詔書発布せられ爾来終戦業務に従事
五、二五	復員の爲「ニユーギニア」に「ソロン」に出發
五、二六	名古屋港上陸
一八、四、一〇	復員完結 以降に於ける部隊人員の異動附録の如し
歴代部隊長名	
大佐	中 田 秀 平
中佐	栗 屋 武
中佐	高 木 盤 雄
中佐	小 田 島 義 悌

(25)

1462

野戦高射砲第五十七大隊略歴

年月日	概	要
昭六、一二、一五	満洲牡丹江省東寧果城子溝野戦高射砲才五十六大隊に於て編成完結、爾后同地にありて防空並に直接国境警備に従事す	
一八、一〇、三	(才ニ軍隷下) 南方転進爾後西部ニユ、ギニア島コマノクワリに至りて対空戦斗に準備に従事す(昭十八、十九日より同年十二月一日迄才十九軍隷下尔后才ニ軍隷下)	
一九、四、一六	補充員として下士官以下九三名到着す	
一九、七、一	敵コンソリデーデット 824十六機編隊と交戦才三中隊陣地に被爆戦死将校ニ、下士官十三、戦傷将校一(中隊長にして同年七月十九日戦傷死)下士官九名を生じたり	
七、一二	敵コンソリデーデット 824十六機編隊と交戦才二中隊陣地に被爆戦死将校ニ(中隊長を含む)下士官兵三十、戦傷下士官三十二名を生ず、此の間高射砲陣地に對する敵機の攻撃は盛にして連日克く敢斗頻繁なる陣地変換等により兵力の消耗に免むると共に其の跳梁を封殺せり、依つて才ニ軍司令官「マノクワリ」に支隊長より夫々賞詞を授与せられたり	戦況の急変に困り後方補給の壯絶に伴い、十九、七以降寧日十機対空戦斗の傍を農耕を促進自活態勢の確立に勉めたり

二〇一三、四	南方販進以来終戦迄に於ける戦病死者は三〇一名にして「マラリヤ」熱帯熱及栄養失調症其の大部を占め主として酷熱瘴癘の地に於ける繁劇なる戦斗及諸勤務に加工補給壯絶に困る糧食及菓物の不足等に起因するものと思考す
二一、五一、四	「ポーランド」ヤシ派遣労務連隊要員として將校以下七七、販出す 終戦以来益々軍紀と厳正にし団結を鞏固にして終戦業務に従事すると共に農耕を強化し体力の増強に勉めたり
五、二八	帰還の使命に浴し、米國「マノクワリ」港出發二十一、五、十六「モツタイ」島「タンジニキラ」寄港同月日出發五、二七内地名古屋港に上陸す 復員完結す
歴代部隊長名	

中佐 大中正光

野戦高射砲第六十八大隊略歴

年月日	概	要
昭一八〇、九	軍令陸甲九三号に依り編成下令	
一〇、三一	千葉原市川鴻の台東部七三部隊に於て編成完結部隊長葛蒲繁雄大尉以下職員	
五三〇	各中隊十九軍に隷属せしめらる	
一一、八	千葉原松戸駅出發	
一一、九	広島着	
一一、一〇	東山丸に乗船にて宇品港出發	
一一、一七	「パラオ」島着	
一一、一八	上陸大隊本部、中隊中隊は本島「アイライ」村に村落隠蔽し中隊	
一一、一八	は「アラカベサン」に陣地占領防空勤務に従事す	
一一、一	中隊十九軍の隷下より中隊の隷下に入らしめられ在「パラオ」筑波部隊の指示	
一一、一	にて阿蘇丸等の三船に分乗して「パラオ」出港	
一一、五	中部「ニューギニア」の「ホーランジャ」着	
一一、六	上陸「ホーランジャ」海岸に仮陣地占領	
一一、一下旬	折田友七中尉飛行場にて往復したる結果	
	「ホーランジャ」は中隊十八軍の戦地地域たるため我が部隊は中隊に隷属す	

二	れども戦斗指揮はオ十八軍司令官の命に従うこととなりオ四航空軍のオ六飛行師団長（在「ホーランジャ」飛行場）の直接指揮下に入らしめられ「ホーランジャ」揚恐場の防空勤務に服することとなりたり。
二月中旬	本部オ三中隊は「インビ」湾岸上にオ二中隊は「ハマデー」海岸にオ一中隊は「イソグロス」海岸に各隊本部的陣地構築開始
三	オ一中隊は「アイタペ」飛行場の警備を命ぜられ中隊長山川啓中尉以下前後三回に亘り「大発」に分散して「アイタペ」に陣地変換したり
三	二二〇〇時頃「ホーランジャ」湾内に停泊せる我が船舶に対し来襲せる米の教機に対し対空戦斗をなす
四	数百機の各種聯合大編隊の米空軍「ホーランジャ」飛行場に対し大空爆を開始す、我が隊は爾後連日その帰途を迎へ対空戦斗に従事す
四	米空軍は「ホーランジャ」地区の貨物集積場の爆撃を開始す我が部隊又之に対し、戦斗を続行す
四	一〇、三〇時頃数百の戦爆聯合大編隊の米空軍我が高射砲陣地を目標とする大爆撃を開始す、此の日の戦斗に際し「インビ」湾岸上の陣地及「ハマデー」海岸の陣地に於て小隊長金谷長矩少尉介隊長岡幸雄伍長等一九名の戦死者と他に数名の戦傷者を出したり爾来二十日迄隔日後に我が陣地に対する爆撃行われたり
四	「ホーランジャ」地区全般に対し米艦載機より低空爆撃終日行はる。

年月日	概	要
昭一九、四二二	拂曉よりの猛烈なる艦砲射撃に引続き米軍「ホーランジャール」に上陸す 我が部隊は才六飛行帰団司令部の所驻地なりし「ホーランジャール」飛行場を經由して所部「ニューギニア」に向け転進を開始したり 米軍の陸海空よりする防衛に依る損耗と加ふる連日の行軍に依る過勞或は「マラリア」等の悪疫のため栄養失調症に陥るもの遂次その数を増し一部米軍の手に入りたるもの以外の部隊員は全部損耗せるものの如くその生死は全く不明なり 依つて昭和二十一年九月二十日附を以て別紙生死不明者死亡認定書の通り才六軍残務整理部長に依り昭和十九年十月三十一日「ホーランジャール」附近に於て全員死亡（一部の戦病死を除く）とすべて戦死（したるものと認定せられたり） 総員五三〇名の部隊員の結末は左記の如し 死没者 四八六名（内訳） 戦死者 四七二名 準戦傷死者 二名 戦病死者 一二名 内地還送者 一名 召集解除者 八名	

	復員者 三四名（米軍の手に入りて終戦後帰還せるもの）

兵役免除者

一名

(31)

1468

野戦高射砲第七十三大隊部隊略歴

年月日	概	要
昭一八、九、二七	野戦高射砲第七十三大隊編成下令	
九、二九	帯広出發	
一〇、四	門司着	
一〇、六	門司出發	
一〇、一二	高雄港着	
一〇、一五	高雄港出帆	
一〇、一九	「フイリップ」に「マニラ」港着	
一〇、二一	「マニラ」港出帆	
一〇、二四	「フイリップ」に「セブ」港着	
一〇、二七	「セブ」港出帆	
一〇、三一	「ハルマヘラ」島「カウ」港着	
一一、三	「カウ」港出帆	
一一、六	西「ミエーギニア」に「マノクワリ」港着、同日より「マノクワリ」要地の防衛に任ず	
一一、二九	「マノクワリ」要地防空戦に参加	
一九、一、七	「マノクワリ」要地防空戦に参加	

野戦高射砲才七十四大隊略歴

年月日	概	要
昭一九三、一五	軍令陸甲才 号野戦高射砲才七十四大隊編成を命ぜられ近衛野砲兵才二連隊補充隊に於て編成着手（日推定）	
三、二六	中部軍より將校以下一〇九名東部軍より下士官以下五名、近衛野砲才二連隊より兵一名転属	
三、三一	東京浦和運送区より下士官以下三〇名応召入隊	
四、四	近衛野砲兵才二連隊に於て編成完結	
四、二四	横浜港出帆、パラオ島に向う	
四、二五	パラオ島コロール港上陸	
五、一〇	パラオ島防空警備	
五、一九	兵三名パラオ兵站病院入院（日推定）	
五、二〇	パラオ島コロール港出帆西部ニユーギニアに向う	
六、一五	西部ニユーギニア、ソロンに上陸以後同地の防空警備	
六、一七	將校以下二十七名マノクワリに向い先発	
八、二五	戦死兵四、戦傷入院兵一（爆薬により）	
八、二五	サラワテ島サマデ飛行場防空警備此の向戦病死下士官四、兵七二名	
八、二五	作戦任務を解除さる	

八二六	終戦処煙業並に現地自活
九一〇	マノクワリ先発隊より連絡あり戦死五、戦傷死二、戦病死一〇、生存者は將校
一〇、二〇	以下野戦高射砲才五十七大隊に転属
二一、五、一〇	現地自活のためマリアットに移住（月日推定）
五、二五	復員のためソロン出帆
	復員完了
	歴代部隊長名 陸軍大尉 笹本 勇

第十八患者輸送隊本部略歴

部隊長 佐久間 茂

年月日	概	要
昭八、五、二一 一〇、二〇	臨時編成完結 大阪港出発 濠北派遣	
自一三、一 至一四、二一	西郭ニユ一ギニア島「マノクワリ」上陸	
自一四、二一 至一五、一	勢一ノ号作戦中「マノクワリ」附近に於て兵二、戦病死せり	
自一五、一 至一六、一	勢二ノ号作戦中「マノクワリ」附近に於て兵一、戦傷死兵二戦病死せり	
自一六、一 至一七、一	勢三ノ号作戦中「マノクワリ」附近に於て兵一戦死兵一戦病死せり	
自一七、一 至一八、一	終戦後「マノクワリ」附近に於て兵三、戦病死せり	
歴代部隊長名	陸軍大尉 佐久間 茂	

ルの外

キニア

患者輸送第八十五小隊部隊略歴

小隊長 北垣 賢三郎

年月日	概	要
昭(八、一〇、二四)	編成完了	
一一、一	大阪港出発	
一二、九	西部ニューギニア、モルッカ洲ソロモン上陸	爾後ソロモン基地設定業務従事
一九、一、三	ソロモンよりサルミに転進	
一一、三	各種作戦戦闘に参加し	
二〇、八、五	将校(見士)一	矢一 戦死
	将校(見士)一	准士官一 下士官三
	兵一 戦病死	
自二〇、八、一六	糧食確保作業従事	
至 四、三〇	下士官一 戦病死	
	歴代部隊長名	少佐 北垣 賢三郎

患者輸送才八十七小隊略歴

年月日	概	要
昭一八、一〇、二〇 一〇、二五 自一九、五、二七 至一九、九、上旬	縮成完結（推定） 西郭「ニューギニア」 「ビアク」島上陸 「ビアク」島作戦参加 「ビアク」島作戦の結果 戦死者 四十六名 生還者 三名	
二、六、一三	歴代部隊長名 大尉 井波 又 郎 復員完結	

患者輸送第八十八隊部隊略歴

陸軍大尉 田林道俊

年月日	概	要
昭二八・一〇・二〇	臨時編成下令	
一一・七	門司港 出港	
一一・八	西都「ニューギニア」マノクワリ上陸	
自 一一・八	勢ヲ一号作戦中船舶輸送間行方不明ヘダバオ沖ニ見習士官一兵三	内地送還
至 一九・四・二一	見習士官一 南方オ十二陸軍病院入院兵ニ「ソロン」滞留下士官二	兵五
自 二〇・四・二二	勢ヲ二号作戦中「マニラ」滞留將一、見習士官一、下士官三、兵八「マニホル」	
至 二〇・三・三一	行方不明下士官一、兵五「ソロン」滞留死亡、下士官一 船舶輸送間行方不明	
	（「ソロン」「ヘルマハラ」間）下士官一、兵二	
	歴代部隊長名	大尉 田林道俊

第二軍第二百二十五兵站病院部隊略歴

年月日	概	要
昭(八)一〇・二	動員下命	
一〇・一七	蜀成完結	
一・一三	大阪港出発	
一・二六	ソロン分院開設下命「マニラ」より將校以下一〇六名派遣す	
一・二八	主力西ニユーギニア島マノクワリ上陸	
一・二二	病院開設趣着收療業務開始	
一・九・七・四	イドレ分院開設の爲將校以下三五名転進	
自(八)一・二八 至(九)四・二一	勢中一号作戦に於て兵二名戦死	
自(九)四・二一 至(二)三・一	勢中二号作戦に於て下士官二名 兵三名戦死	
自(二)三・一 至(二)三・三	尚、期間中「ビアク」島に派遣の將校一兵名は敵上陸により生	
自(二)三・三 至(二)三・五	死不明となり終戦後投棄隊を以て捜索せるも不明なり	
自(二)三・五 至(二)三・六	勢中三号作戦に於て將校一名下士官一名兵九名戦死	
自(二)三・六 至(二)三・七	間に於ける病死將校三名下士官四兵三五名	
自(二)三・七 至(二)三・八	復員完結す	
自(二)三・八 至(二)三・九	歴代部隊長名 陸軍軍医中佐 圓尾 淳 治	

第二十七野戦防疫給水部略歴

年月日	概	要
昭一八、一〇、一七	東京中ニ陸軍病院に於て才百二十五兵站病院防疫給水瓶として編成完結	
一一、三	大阪港出帆	
一一、八	軍令により才ニ十七野戦防疫給水部に転属	
一二、八	西部ニユーギニアマノクワリに上陸中ニ軍隷下に入る	
一九、六、二〇	爾後全地区の防疫並に防疫給水及防疫に任ず 勢欲立才一旅団司令部直轄となり引続き同地区の防疫並に防疫給水並に防疫に任ずると共に旅団司令部医務業務並に「マノクワリ」支隊司令部医務業務を担当す	
二一、五、二九	「マノクワリ」出発	
六、一	名古屋港帰着 復員完結す	

(44)

1478

第十歩兵団司令部略歴

年月日	概	要
昭一九、四、六	軍令陸甲中、号により中十派遣隊司令部の編成を命ぜられ中十師団司令部に於て編成に着手	
四、一	中十師団司令部に於て編成完結	
四、二	転用の為佳木場出発	
四、一五	関東州界通過旅順着	
五、一	旅順出発	旅順に於て中十派遣隊編成完結
五、二	関東州界通過	
五、三	鮮満国境通過	
五、一八	南方派遣のため釜山港出発	
五	門司寄港	
五、三〇	(日推定)比島マニラ寄港(隷下たる ^{ミリス} は同地よりサンギへ島に分進す)	
六、一三	濠北ハルマヘラ島サレタ上陸、爾後同島北地区隊となり同地附近の警備並キロタイ作戦突入基地として同島に対する人員資材の突入輸送担任	
二〇、八、一四	終戦	
自一九、六、一三至二〇、八、一四	戦死戦病死状況復員関係書教参照	
二〇、一、一四	同島ベテワンに転進、同地附近に於て終戦処理業務並同地自活	

二五九	復員の急ハルマヘラ島出発
五二九	名古屋上陸
五三一	復員完結
歴代部隊長名	陸軍大佐 能 島 武 策
部隊事情精通者	島根県入束郡野波村瀬崎
副官	陸軍大尉 木 村 清次郎

(43)

1480

独立守備歩兵第二十三大隊部隊略歴

年月日	概	要
昭和九 四 五一八	駐屯地林口を出発、旅順に於て待機	
六一三	釜山港出發途中下関及台湾高雄及「マニラ」に寄港	
二一五二〇	「ハルマヘラ」島「ガレラ」に上陸、同地附近の警備に従事す	
二一	部隊は歩兵一中隊（隊長以下一五〇名）を「モロタイ」島に派遣せる外特別の 戦斗なし	
	名古屋港上陸	
	復員完結	
	部隊名	
	初代 中佐 浜野正己	
	二代 “ 松永英夫	
	三代 少佐 大西壽良	

独立守備歩兵第三十 隊略歴

年月日	概	要
昭和九、四、一〇	独立守備歩兵第三十大隊編成完結	
四、一	南方転用のため駐屯地哈爾濱出發	
五、一八	釜山港出發	
六、一三	モロッカ諸島ハルマヘラ島ガレラに上陸爾後同島警備	
九、一五	モロタイ島に米軍上陸するや敵企図を防禦せんと九月二十六日ヲ三斷込隊を編成しモロタイ島に突入せしめ、遊撃戦を敢行す	
一、二、一五	再び抽出転用部隊を編成し、モロタイ島に突入せしめ爾後遊撃戦を続行す	
二、一、一四	終戦により同島ベラワンに集結同地に於て終戦処理業務並に現地自活	
二、五、九	同地を水陸	
五、二〇	石古屋港上陸	
五、二一	復員完結	
	部隊長	
	陸軍少佐 岩切慶藏	

(45)

1482

第二特設水路輸送隊略歴

年月日	概	要
昭一八 六 一	仏領印渡支那西貢に於て編成同地より転進、爾後昭南にて作戦準備並に警備	
九 一	ジャワ島に転進作戦準備並に警備	
一九二〇 六 一五	西部ニューギニアマノクワリに転進爾後同地に在りて揚陸作業道路工築	
六 二〇	「ウインデシ」に於て揚陸作業中敵機空襲により戦死（兵一）	
至自 七 一三	勢中二号中二期転進作戦中將校六、下士官三三、敵機空襲を受けて戦死	
九 一七	「ソロン」に転進	
二一 一 二〇	復員完結	
五 二六		
歴代部隊長名	大尉 坂元三郎	
	大尉 石岡道政	

第十四師団海上輸送隊略歴

年月日	概	要
昭一八、一〇、五	満洲佳木斯	独立工兵中隊十二連隊として比島「セブレ」に転進
一三、二五	「サルミ」	「ビアク」
三、五	マノクワリ	中隊十四師団海上輸送隊に改編
五、二七	「ピアク」	五月二七日以降ビアク島作戦中中隊一、中隊三の將校七、下士官兵三七七名、昭和二十年三月十九日戦死確認す
一、九、七	「マノクワリ」	「ウインデシ」
	「イドレ」	主力（本部及一中隊、中隊三の一部）材料廠「マノクワリ」より「ウインデシ」に転進中「ワサリ」
	「イドレ」	向に於て將校三、下士官兵十八戦死し、
	尚九月三十日「ニューギニア」	「ワシヤビス」に於て中隊主力敵魚雷艇と
	交戦し將校、下士官兵十五戦死す	
八、二六	「イドレ」	中隊四同地着同地警備
八、一五	「コンダ」	中隊の一部（海上機動基地設定地）「コンダ」に於て敵交戦し、下士官兵戦死す
九、二四	「ソングロコ」	「ニューギニア」
	「ワングメン」	湾「ソングロコ」沖に於て
	「サルミ」	より帰還中の中隊の一部敵魚雷艇と交戦し下士官以下十五戦死
	生死不明十六、	

(47)

1484

年 月 日	概	要
昭和二〇、四、二五 至、二一、二六 五、二六	「サンサポール」中の主力艦地区北岸作戦に参加、下士官兵二戦死す。 ベラウ地区部隊主力ソロン集結 復員完結	

野戦照空第四大隊略歴

年 月 日	概 要
昭 一六 七 一 六	臨時編成（甲）下令
八 二	編成完結（大隊本部ヲ一才ニ申隊）
一七 一 二 二 八	才ニ申隊南方に転用（茲才五〇六六部隊となる）
至 一六 一 一 二 〇	滿洲国東安省東安附近の警備
一八 一 二 二 二	南方転用のため東安出發
一 九 一 一 〇	西部「ニコロギニア」モルツカ州「サルミ」に上陸
至 一 九 一 一 四 一 〇	才三十六師団長の指揮下に入る
至 一 九 一 一 五 一 一	「サルミ」及「マツフィン」附近の警備並作戦準備
至 一 九 一 一 五 一 六	「サルミ」及「マツフィン」附近の対空戦斗
至 一 九 一 一 五 一 七	「トム」及「マツフィン」附近の戦斗
至 一 九 一 一 五 一 七	「サルミ」地区敵進攻破砕作戦
至 一 九 一 一 五 一 七	「サルミ」地区敵掃蕩並守備
至 一 九 一 一 五 一 七	以降、終戦に伴い業務処理
二 一 六 二 一	復員完結
	歴代部隊長名 陸軍少佐 牛尾信男

年月日	概	要
	陸軍少佐 森 依 代理 陸軍大尉 作田 嘉人	

(50)

1487